

ジョン・ウェスレーの職制理解 ——「1784年の按手礼」とメソヂズム——

林 牧 人

序

ジョン・ウェスレーによる「1784年の按手礼」執行は、メソヂストの英国国教会からの分離を決定づけた出来事として、メソヂスト、アングリカン両陣営から注目されてきた。しかし、ウェスレーは、教会論、とりわけその中心をしめるところの職制理解について、まとまった記述を残していない。従って、この点に関するウェスレーの思想を知るためには、彼がいろいろな時期にとった行動、人々に与えた手紙の中で折に触れてなした発言等の、膨大な資料の綿密な研究が必要である。本論では、この膨大な資料の扱いに示唆を与える諸研究と折衝しながら、『日誌』、『日記』、『手紙』、『説教』等の一次資料を考察することによって、ウェスレーの教会観、職制理解の変遷をたどり、ウェスレー自身の「1784年の按手礼」理解、ならびに、その功罪を明らかにする。ウェスレーと我々との間には、約200年余の開きがある。その間、メソヂスト教会は確実に歴史を刻み続けてきた。これらを見無視して、明らかにされたウェスレー自身の理解をそのまま、今を生きる教会の形成に適用することはできない。しかし、今後の課題として、日本基督教団という合同教会形成に参加している日本のメソヂストが果たすべき役割と責任について考えるために、一つの指針たりうるものを提示することを目的とする。

1. 「1784年の按手礼」と問題の所在

「1784年の按手礼」に関する、ウェスレー自身の記録は、『日誌』に記された驚くほど簡単なもの以外、見いだせない。しかもこれだけでは、任命に按手が伴ったのか、どのように執行されたのかはまったくわからない。しかし、この「任命」が按手礼を指していることは、『日記』に残されている「按手した (ordained)」という言葉から明らかである¹⁾。さらに、ウェスレーによってコークに与えられた「按手礼執行証明書」の記述から、按手礼執行の状況を、ある程度知ることが可能である²⁾。

ウェスレーは、9月1日、ジェームス・クライトンとトーマス・コークに補助されながら、早朝4時（ないしは5時）、リチャード・ファットコートとトーマス・ヴェイジーに、執事 (deacon) の按手を施した。翌朝、同じ補助者とともに同じ時刻に、彼らに長老 (elder) として按手を施した。その後、ジェームス・クライトンと二人の新たに按手を受けた長老、ファットコートとヴェイジーたちの補助で、ウェスレーは、アメリカ・メソヂストにおける監督 (superintendent) として、コークに按手を施した。これが、数少ない一次資料と、決して多くはない二次資料とを通して、推測しうる「1784年の按手礼」の実際である³⁾。

アメリカに向かったコーク等には、いくつかの文書が託されていた。その中の一つ、1784年9月10日付のウェスレーの手紙「北米にあるコーク博士、アズベリー氏、並びに兄弟たちへ」は、「1784年の按手礼」を考察するにあたって、ウェスレー自身の意図を説明した貴重な文書である⁴⁾。この文書を基礎に、同年12月24日、クリスマス年会と呼ばれるアメリカ・メソヂスト監督教会としての最初の年会において、コークはフランシス・アズベリーに按手礼を執行し、「監督 (superintendent)」に聖別した。以後、アメリカ・メソヂスト監督教会は、現在の合同メソヂスト教会に至るまで、この按手礼との連続性を保ち続けているのである。

この出来事が、メソヂストにとって、きわめて重要であるにもかかわらず、ウェスレーは沈黙を守っている。何よりもこの沈黙が、「1784年の按手礼」に

対する多様な解釈を生み出している⁵⁾。第一は、「1784年の按手礼」の合法性、有効性を問うものである。これは特に、アングリカンの立場で問題とされる。アングリカンにとっては、たとえ任命の手続きが不備であっても、「使徒継承に基づいて聖別された主教達によって、正しい形式と正しい意図」の下に聖別されたか否かが一番の問題となる。それ故、「1784年の按手礼」は、「使徒継承に基づく歴史的主教職」を持たないウェスレーが執行者であったことが、その合法性、有効性にとっては致命的なのである。第二は、ウェスレーが緊急事態を前にして、やむにやまれず誤った決定を下してしまった、という、一種の同情論である。しかし、同情のあまり、この緊急事態を放置した当時の英国国教会側、あるいは、「自分たちの教職」を熱望した当時のアメリカ・メソヂストに責任を負わせることは、ウェスレー自身の言動にそぐわない⁶⁾。第三は、ウェスレーにとって、既存の英国国教会の職制を破らぬよう、「聖別ないしは祝福」のつもりで行ったことが、コークやアズベリー、アメリカのメソヂストによって、「按手礼」と誤解されてしまったという見解である。たしかに、ウェスレーは、「按手」という用語を避けているように見える。しかし、私的な『日記』には、はっきりと用いている。その後も頻繁に続くウェスレーの按手礼執行の経過を見ると、この責任を、ウェスレー以外の他の人物に帰することはできない。

前述の三つの解釈はどれも、擁護するにせよ、批判するにせよ、「ウェスレーが英国国教会の僕として正しかったか、誤っていたか」という観点からの解釈である。もちろん、ウェスレーが英国国教会の忠実な僕であろうとしたことは否定できない。しかし、彼は、英国国教会司祭というだけでは説明し得ない何かを持っていたのではないだろうか。そこで、ウェスレー自身の意図は何であったのか、職制理解はどのようなものであったのか、ということに重点を置いた解釈が生まれるようになった⁷⁾。「説明し得ない何か」とは何か。ここにこそ、今回の論文が求めている、ウェスレーの職制理解と実践の鍵が存在すると思われる。

2. ウェスレーの職制理解の変遷——「1784年の按手礼」の背景

ジョン・ウェスレーの職制理解の変化を考察する際に、前提となるのは英国国教会の教理と実践である。それが表されているのは、言うまでもなく、『39箇条 (39 articles)』(1571年) および、『祈禱書 (Book of Common Prayer)』(1662年) である。これらについて、ウェスレーは次のように述べている。

「子どもの時から、わたしは、神の啓示としての聖書を愛し、尊敬すること、それに次いで、最初の3世紀間の書き手である初代教父たちを尊ぶことを学んだ。初代教会の次にわたしが尊ぶのは、世界で最も聖書的な国教会である英国国教会であった」⁸⁾。

「わたしは、英国国教会の祈禱書ほどに、堅実で、聖書的で、理性的な敬虔の息吹を感じる式文は、古今いずれの言語においても、世界に存在しないと信じています」⁹⁾。

ここから読みとれるのは、ウェスレーが、アングリカニズムにおいて一般的に主張される「公同性 (Catholic)」を信奉していたことである。『39箇条』のもつ豊かさと一致、『祈禱書』への愛着、これらもまた、それがもつ「公同性」の故である¹⁰⁾。しかし、ウェスレーの愛と忠誠心にも関わらず、『39箇条』は広く一般に受容されていたが、正しく実行されなかった。例えば、福音は朗読されるが説教されない。人々は受洗するが魂は救われない、といった具合である。これは、他でもない、ウェスレーの突きつけられていた現実である¹¹⁾。この現実の下で、ウェスレーの教会観は、変遷して行くのである。英国国教会への忠誠心と愛、対して、理想の教会とはほど遠い英国国教会の現実に対するフラストレーション。この二つの複雑な緊張関係が、変化の原動力となっていると考えられる。本章では、この緊張関係を解きほぐし、ウェスレーが「1784年の按手礼」執行を決断するに至るまでの、ウェスレーの教職理解の変遷を考察する。

2.1. エプワースからオックスフォードへ

高教会主義者である両親のもと、エプワースの牧師館で生まれ育ったジョン・ウェスレーに与えられた教会観は、まさしく、高教会主義そのものであった。この高教会主義¹²⁾がもつところの、初代教会への憧憬、特に、キリスト教の最初の5世紀の信仰と実践にたいする憧憬は、「使徒継承に基づく主教の按手の連続性」を証拠とする、英国国教会の初代教会との時代を超えた一致の自覚と相まって、ウェスレーをして、教父研究に没頭させたのである¹³⁾。教父研究は、彼に「理想の教会」の姿を浮かび上がらせた。それは、新約聖書の教会と、最初の3世紀の教会であった¹⁴⁾。それは、コンスタンティヌス帝の改宗によって、教会と国家が一つになることにより、そして、教会が迫害から解放されることによって、黄金の時代は終わった、とするウェスレーの見解による¹⁵⁾。ニケア以前の教会に対する尊敬は、1725年、彼が按手礼受領を考えた時、父サムエルからの手紙によって、さらに強められたが¹⁶⁾、ここで注目したいのは、このウェスレーの初代教会への憧憬と教父への傾斜が、既にこの段階で、英国国教会への忠誠心と理想の教会像という緊張関係の萌芽となっている点である。ただし、彼の高教会主義は未だ、親譲りのものに過ぎず、英国国教会に対する信頼は、疑う余地がなかったため、深刻ではなかった。

1729年、エプワースでの牧会を辞して、弟チャールズのはじめた、「ホーリークラブ」の指導のために、彼は、オックスフォードに戻ってきた。そこで、ジョン・クレイトンとの交わりを得たことは、その後のウェスレーに決定的な影響を及ぼした¹⁷⁾。クレイトンは、臣従拒誓者 (Non-juror) の指導的人物、ディーコンの圧倒的影響を受けており、ウェスレーの『使徒の規約 (Apostolic Constitution)』を重んじる実践などは、彼によってもたらされたものである¹⁸⁾。彼は、クレイトンとともに、初代教会のように、水曜日と金曜日の断食を行ったりするなど、臣従拒誓者の実践を自らのものとして行った¹⁹⁾。ウェスレーは、初代教会の複製を現在再建することは不可能であることを知っていたが、聖礼典の重視、キリスト者の完全の追求をはじめとして、いくつかの要素は自分のものとした。これらは、彼のメソヂズム全体の構想を生みだし、実現

していく原動力となった²⁰⁾。

この時点での彼の教職理解は、「使徒継承に基づく主教職による按手を伴う三職位」をかたくななまでに信じることにあらわれている。臣従拒誓者の影響を受けたことで、それは、使徒的实践であるという確信がいよいよ強くなった。しかし、一方で、臣従拒誓者も英国国教会から見れば「非国教徒」である。ここに、ウェスレーにおける現実の英国国教会と理想の教会像との緊張関係は、より深刻の度合いを増しているのである。しかし、彼にはその緊張関係の持つ深刻さは意識されなかった。この初代教会の理想と考えた実践こそが、ジョージア宣教の失敗の主要因となるにおよんで、ウェスレーは、初めてそれを知るのである。

2.2. ジョージア宣教からアルダスゲイトへ

ウェスレーは、1735年、USPG²¹⁾の宣教師として、アメリカに渡り、ジョージア州で牧会した。この粗野で荒れ果てた、開拓期のアメリカ大陸で、しかも、多くの教派的背景を持つ会衆の中で²²⁾、彼は英国本国でも受け入れられない、臣従拒誓者的実践を強引に行った。何もない土地にたつ開拓教会の牧会は、ウェスレーにおいては、初代教会に範を採る理想の教会の牧会と同一視されたのである。ソフィー・ホプキー事件²³⁾が直接の引き金となるのを待つまでもなく、ウェスレーの臣従拒誓者的実践が挫折し、その失意と絶望の中から、アルダスゲイトの回心が引き起こされる、というのは、いわば定説となっている事柄である。しかし、彼の教会論にはどのような変化があったであろうか。

「(わたしは) 古典を、聖書の規則の下位に置くよりもむしろ同位においてしまう誤りに陥っていた」²⁴⁾。

ジョージアから帰ったウェスレーは、古代教会への服従が、無批判的で、無理であったことを知った。しかし、彼の根底にある、教父理解は、彼の基本的な神学、教会観に影響を持ち続けた。この立場は、彼の人生を通して貫かれた

立場である²⁵⁾。

「わたしたちは、彼らの書物を読むときに、聖書と等しい権威を見るのではない……しかし、(彼らは) かつて存在したあらゆる作者に優って尊敬するに値する」²⁶⁾。

「わたしはニケア以前の教父が聖書に反しない限り、彼らに権威を認める」²⁷⁾。

ウェスレーがニケア以前の教父を重んじたことは周知の事実である。使徒たちに時代的に近く、福音に忠実と考えるからである。彼らの書いたものは、聖書と等しくなくとも後代のものよりもはるかに権威がある。しかし、彼は聖書のみを根元的な基準としていた。聖書に反しない限り、伝統は尊重されうるのである。これこそが、教会教父の立場でもあったと、ウェスレーは考えたのである。さらにこの見解を裏付けたのが、ジョージアにおけるベヴァレッジ主教の『教会会議決定事項集 (Pandectae Canonum Conciliorum)』の読書である²⁸⁾。

さらに、彼の教会論の変遷の観点から、このアメリカ行きを見るとき、ヘルンフート兄弟団との出会いが、重要であると思われる。ウェスレーは、彼らの敬虔さに圧倒され、ジョージアにおいて積極的に交わりをもった。ウェスレーはここに、彼が理想とした初代教会の姿を見た²⁹⁾。しかも彼らは、英国国教会の囲いの外にある人々であった。このモラヴィアニズムとの出会いが、彼の「アルダスゲイト回心」の大きな要因であることは間違いない。確かに、この回心によって、教会の伝統と遵守についての高教會的理解は、常に、彼の心の内の聖霊の証しによって、直ちに知られ、また、聖書によって確認される神の意志に従属した³⁰⁾。しかし、これによっても、ウェスレーの高教會的实践は変化しないし、回心後1745年まで変化しないのである³¹⁾。回心後、非国教徒の再洗礼執行を希望して、ロンドン主教に召喚された³²⁾こともあるほど、職制理解は依然として「使徒継承に基づく主教職による按手を伴う三職位」をかたくな

なまでに信じることであった³³⁾。

しかし、この段階において、現実の教会と理想の教会像との緊張関係は微妙な質的变化を見せているように思われる。現実の教会の姿は変わらないが、理想の教会像が変化を見せている。モラヴィア兄弟団との出会いを通して、彼の理想の教会像は、英国国教会の枠組みを越えて、より広い「公同性」を帯びるようになったのではないか。ここではじめて、英国国教会の現状と理想像との緊張関係は、深刻さを増してくるのであるが、ウェスレー自身の目は、未だはっきりと、理想の教会像を実現するのに最も適した器として、英国国教会を捉えていたのである³⁴⁾。ウェスレーは、『39箇条』の第19条「教会について」を引用して、次のように語っている。

第19条「キリストの可見的教会は信仰者の会衆である。そこでは、神の純正な御言が説教され、また聖礼典について必要とされている事柄に関してキリストの御命令通りに聖礼典が正しく執行されなければならない」³⁵⁾。
「国教会の慣習からずれていると正当に言われるのは、神の言葉が正しく説かれず、礼典が正しく執行されていない場合のことである」³⁶⁾。

この観点からすれば、野外説教開始、信徒説教者の登用などと共に、彼の高教會的理解と実践が共存していても、ウェスレーにとっては矛盾どころか、「聖書に反しない限りにおいて」(傍点筆者)、より「公同的」であり「使徒的(Apostolic)」であった。

2.3. 初代教会の再解釈——2冊の書物

様々にわき起こる迫害と分離への誘いに、1744年以來のウェスレーは、宗教箇条19を引いて、分離への答としてきた³⁷⁾。これに加えて、1745年8月、メソヂストソサエティ第2回年会において、ウェスレーの職制理解がはっきりと語られた。

問 5 主教制，長老制，会衆制の教会制度のうち，最も理性にかなうのはどれでしょうか。

答 教会制度のありのままの起源は次のようではなかったかと思います。キリストは福音の説教者を派遣する。彼の言葉を聞いた幾人かは、悔い改め、福音を信じる。そして彼らは、彼に、彼らを牧会し、信仰によって彼らを成長させ、義の道のうちに彼らの魂を導いて欲しいと願うようになる。その時、ここには「独立した」会衆がいます。彼ら自身の持つ牧師の他に、他のあらゆる人々、団体によっても、霊的な事柄について管理される責任は全くないのです。しかし、すぐ後に、牧師が彼を遣わした方の名において話している時に、他の会衆からたまたま出席した者たちが、彼に、彼らもまた牧会して欲しいと懇願する。それが神の御旨だと知るとき、彼は承諾する。すぐさま、彼は、彼の会衆のなかで最も賢く最も聖い者たちと協議をし、彼らの助言と共に、彼が戻るときまで群を養う賜物と恵みを持つ者を、一人ないしは複数任命する。もし、神が新しい土地に他の群を起こすことを望まれるならば、彼は、彼らのもとを去る前に、同様のこと、すなわち、神が、これらの魂を養うに適當であると認める者をまた任命する。同様にまた、彼の言葉によって小さな群を集めることを神が望まれる所ならどこにおいても、彼は、留守中、残った者を監督し、神に賜った能力によって彼らを助ける者を任命する。彼らは執事／助祭 (deacon)、あるいは教会の僕です。そして、最初の牧師を共通の父としてみなします。さらに、これらすべての会衆は、彼を同じ光の中にいるとみなし、彼らの魂の牧者としてなお彼を尊敬するのです。これらの会衆は全く「独立」してはいません。彼らは、お互いに依存してはいなくても、一人の牧師に頼っているのです。これらの会衆が増えるとき、彼らの執事／助祭は、年月と恵みによって成長します。彼らは下位の他の執事／助祭あるいは、助け手が必要になります。彼らを尊敬する意味で、彼らは長老／司祭 (Presbyter) あるいは長老 (Elder) と呼ばれるようになるのです。同様に、主にある彼らの父は、彼らすべての監督／主教 (Bishop) ある

いは、監督（Overseer）と呼ばれるようになるのです。

問 6 牧師（Pastor）と彼の牧する群との間に相互の承認が絶対に必要なのでしょうか。

答 言うまでもありません。人が、わたしによって導かれることに同意していなければ、わたしはいかなる魂をも導くことは出来ません。同意がなければ、いかなる魂をも、わたしを導き手にすることを強制できません³⁸⁾。

ここに提起されたウェスレーの教会統治の起源についての歴史的考察、また初代教会に関する見解は、徐々に変化の兆しを見せはじめていることは想像に難くない。同年12月30日付けの手紙には、以下のように記されている。

「……わたしたちの信ずるところに拠れば、使徒たちから継承された（とわたしたちは信じています）主教たちから、洗礼や聖餐を執行することへの任命を受けないで、それらを執行することは、わたしたちにとって正しいことではないのです。しかも、わたしたちはこの主教たちが、ローマの主教に依存していた主教たちの後継者であることを認めているのです……わたしたちの信ずるところに拠れば、教職の三職位は（これをあなたは教皇的教職権と主教制とによって解釈するらしいが）、ただ使徒的制度によるだけではなく、聖書によっても権威づけられているのです……わたしたちは、次のように告白しているのです。(1) わたしたちは、健全な良心を持ってなしうる限り、国教会のすべての法に服従する（法とは、礼拝法規とわたしたちが考えている法のことであって、教会裁判所の慣例のことではない）。(2) わたしたちは、右と同じ限度で、これらの法の執行者としての主教たちに服従する。けれども、これらの法からかけ離れた主教たちの意思に、全的に服従するということは告白しません……」³⁹⁾。

ここには、理想としての英国国教会と現実の英国国教会とが交錯しているよ

うに見える。しかし尚、「使徒継承による三職位」についての信仰は崩れてはいない。しかし、恐らく、この手紙がウェスレーの使徒継承 (Apostolic Succession) への信仰の表明の最後である⁴⁰⁾。年が明けて、1746年8月、彼は1冊の書物と出会う。

〔1月〕20日。ブリストルへ出発。途上、キング卿の『初代教会の解説』を読む。わたしは自分の教育の熱烈な先入観にも関わらず、本書が公明正大な考えであることを信じようとした。もし信じたとすれば、主教たちと長老たちとは（本質的に）一つの序列であり、どのキリスト教の会衆でも、元来、それ以外のすべてのキリスト教諸集会から独立している一つの教会であるということになるかも知れない⁴¹⁾。

キング卿の『初代教会の解説』⁴²⁾に拠れば、初代教会においては、主教／監督たちと司祭／長老たちの違いは、称号 (degree) であって、階級 (order) ではない。それ故、実際に交替可能である⁴³⁾。このことを受け入れたウェスレーは、司祭である自分自身に、すでに按手礼執行への供えがあることを信じ、結局は按手礼を執行することへの確信となったのである⁴⁴⁾。

次に出会うのは、エドワード・スティリングフリートの『イレニクム』である⁴⁵⁾。この書物によって、「教会統治の形態は、単なる思慮深さの問題であって、神の言葉によって規定されるのである」⁴⁶⁾、言い換えれば、教会統治のあらゆる形態は、聖書に反しない限り妥当であるが、聖書は特別これが正しいという形態について語っていないし、それは、主教／監督制に関しても同様であることをウェスレーは示されたのである⁴⁷⁾。1756年、ウェスレーは手紙に記している。

「わたしはまだ、教会統治の主教制の形態が聖書的かつ使徒的であると信じています。つまり、使徒の実践と著作に適合していると言いたいのです。しかし、主教制が聖書に規定されているということはわたしは信じて

いません。この考え（かつてはわたしが心から信奉していました）は、わたしがスティリングフリート博士の『イレニクム』を読んで以来、わたしをひどく恥じ入らせています。わたしは、彼が反論の余地無く以下のことを証明していると考えています。キリストも彼の使徒たちも教会統治のいかなる特別な形態も規定していないこと。そして、主教制が神的權威であるという主張は、初代教会において決して聞かれなかったことです」⁴⁸⁾。

ここにきて、彼の理想の教会としての初代教会は、少なくとも、原理上は、主教制である必要がなくなったのである。ここには、高教会主義者として信奉してきた「使徒継承に基づく主教の按手を受けた三職位」の理解はない。このことは、彼が国教会の主教制を変えようと思いはじめたことを意味しない⁴⁹⁾。また、理想の教会を初代教会の理解と実践に置き、それに範をとって行動に移していく姿勢は変わっていない。しかし、ここではもはや、英国国教会はベストではなく、「ひとつのモデル」にすぎないのである。初代教会に範をとることが「公同性」を証しすることになるならば、ウェスレーは、より広い意味での「公同性」を、当時の現実の英国国教会とは「別の仕方」で追求しはじめていたとみることもできよう。そして、今、二つの書物によって、ある意味で英国国教会とは「別の仕方」の事柄に、アカデミックな後ろ盾を得たのである。

2.4. クライマックス——1784年

2冊の書物を通しての学びは、ウェスレーが1738年から得ていた確信を確かなものにした⁵⁰⁾。

「わたしは、通常の（ordinary）召命と特別な（extraordinary）召命の両方を得ています。わたしの通常の召命は主教によるわたしへの按手礼です。わたしの特別な召命は、わたしの牧会において働かれる神の働き、すなわち、このわたしの職務の実践において真理としてわたしと共に神がおられることによって証明されるのです」⁵¹⁾。

18世紀英国国教会の大多数の牧師たちが、メソヂズムに対して、無関心か、あるいは暴力的反対を表明したことは言うまでもない事実である。しかし、彼らは「英国国教会の失われた羊」に対しては、何もしなかった。ウェスレーの説教の結果、彼らは彼の牧会のもとに入った。そして、ウェスレーは神の力によって、彼らを信仰の内に成長させねばならないと感じていたのである⁵²⁾。これこそが、ウェスレーの言う「特別な召命」であり、現実の英国国教会と理想の教会像とをつなぐ要であった。理想の教会像が、現実と乖離していればしているほど、現実の教会を、理想の教会の姿に導いていくこと。これこそが、ウェスレーの重大なる関心事となったのである。結論として、ウェスレーはキング証言以上のものを導出した。主教と司祭が同じ職位であり、同様に按手する権限を持っているならば、司祭も主教を生み出す按手の権限を持っているとの認識である。しかし、現実の英国国教会ではこれは真実ではない。なぜなら、主教が司祭よりもより多くの霊的恵みを得ていなかったとしても、主教は、英国国教会教役者を任命する権威を持った唯一の人物だからである⁵³⁾。

後に、ウェスレーは、コークと適当な他の司祭 (Presbyter) に補助されて、数名の説教者に按手をする原型の計画よりも更に先に進んで、コークを監督 (Superintendent) に按手しようとしていた。それを可能ならしめる根拠として、4～5世紀のアレクサンドリア教会で受け継がれてきた手続きが主張される。ここでは、主教 (Bishop) が死んだとき、司祭 (Presbyter) たちは、あらゆる外部の力に依ることを避け、司祭団の中から次の主教を選出したとし、ウェスレーは、これを模範として受け入れたのである⁵⁴⁾。もはや、ウェスレーの司祭 (presbyter) としての「叙任 (ordin)」が主教と等しいのみならず、「程度 (gradu)」においてもそうであったのである。人々は、彼によって牧会されることに同意した、否、要求したのである⁵⁵⁾。彼の「特別な召命」は、主教職にまで及んだ。ウェスレーは、この霊的危機の状況下においては、彼のもつ「特別な召命」が、このような行動を正当化するという責任を負ったのである⁵⁶⁾。ウェスレーの意識においては、メソヂストに対しても、非メソヂストに対しても、彼の主教職 (Episcope) は、まさに「公同的」な職務とし

て、神によって祝福されたのである⁵⁷⁾。

ウェスレーはこのように、人々と説教者に対して「特別の召命に基づく主教職」を行使する可能性を見いだしていたのである。しかし、その機会はなかったし、英国内でそれを行うつもりがなかった。英国内で理想の教会をめざすとき、すなわち、初代教会の範をとるとき、そこには、モデルとなるべき英国国教会が存在する。初代教会の範を重ね、はみ出した部分を削り、欠けているところを補って理想型に近づけていくのが、メソヂストの役割である。しかし、アメリカは事情が異なる。かつて、ウェスレーがジョージア宣教で感じた初代教会の現在。アメリカには希望があった。何もないところにこそ、初代教会の実践とも言うべき「新しい教会」は、初代教会の範型通りに最初から造りあげることができるのである。独立戦争で疲弊したアメリカ。多くの英国国教会司祭たちは、戦争勃発と共に、本国やカナダに逃亡してしまった。アメリカのメソヂストたちは、牧会されることを望んでいた。真の「公同性」の交わりに入ることを求めていた。

「アメリカの兄弟たちは、今や国家からも英国の位階制度からもすっかり解放されているのですから、わたしたちもあえて、彼らを再び困惑させはしません。彼らは今や、聖書と初代教会に単純に従う、完全な自由をもっているのです。わたしたちの判断によれば、彼らは、神によって奇しくも自由にされている、この自由を確保することが最善なのです」⁵⁸⁾。

今や、機は熟した。そして、「1784年の按手礼」執行の時を迎えたのである。ジョン・ウェスレー、81歳の時であった。

結

「1784年の按手礼」執行に際して、ウェスレー自身が持っていた意図は、今までの考察を通して明らかとなった。「1784年の按手礼」と、その後のアメリカ・メソヂスト監督教会に関しては、当時の英国国教会当局のかたくなさから

くる、やむを得ぬ分離であったとする見解が多い。しかし我々は、敢えてこの按手礼を、ウェスレー自身の「公同性」の理解から来る積極的なものと受けとめたい。今回は、その客観的な証拠と思われるものを2点だけあげておく。

第一は、ちょうど同じ頃、主教不在の状況を打開すべく、動き出した、アメリカのアングリカンとの関係である⁵⁹⁾。ウェスレーは、合法的にアメリカ向けの按手礼が行われ、米国聖公会が誕生することがわかっているにもかかわらず、自らの按手礼を執行し、また、一致への対話も拒絶しているのである。これが何を意味するかというと、ウェスレーの按手礼の動機には、アメリカにアングリカンの教会と教職が供給されないからというだけではない、アングリカン・コミュニオンからの分離も辞さない、積極的な動機が含まれていたということである。その動機とは何か。それは、前章で指摘したとおり、初代教会の建設であった。

第二は、アメリカ・メソヂストにおいては、「主教 (Bishop)」か「監督 (Superintendent)」か、という問題である。1784年当時「監督」が用いられたが、早くも1787年には「主教」が使用されるようになった。このことに対するウェスレーの怒りは、普通ではなかった⁶⁰⁾。英国国教会の単なる再建をねらったのであれば、このこだわりは出てこない。上述の米国聖公会との関係も併せ、「1784年の按手礼」において、ウェスレーが、限りなく純粋な初代教会の復興を意図していたことが読みとれるのではないか。

この2点と共に忘れてはならないのは、按手礼のフォームと方法、それらを含む祈禱書の改訂である。書き起こしではなく「改訂」である。このことは、アングリカンとの連続性をウェスレーが放棄したわけではないことを示している。ここで考えられる連続性は、言うまでもなく、狭義の「使徒継承の連続性」ではなく、彼がその「公同性」の故に愛していた、アングリカニズムの遺産と伝統を考えるべきであろう。メソヂズムは英国国教会から、荘重な礼拝様式と、長い歴史を通して形成されてきた典礼等に代表される、豊かな教会性の遺産と伝統を受け継いだ。メソヂズムをセクトになることから救ったのは、まさにこの点にある。はじめから、教会の「公同性」が自覚されていたわけである。だから、たとえメソヂストが、国教会から分離した独自の教会を形成して

も、内容的に言えば、それは教会であってセクトにはならない。公同教会の交わりの中に自覚的にいるのである。この事情はもちろんのことウェスレー自身の伝統に対する基本的な態度、対し方に影響されている⁶¹⁾。日本基督教団の形成に参加している日本のメソヂストは、教憲前文の「各々その歴史的特質を尊重しつつ、聖なる公同教会の交わりに入った」との一句をもっと自覚的に受けとめる必要があろう。ウェスレーがそうであったように、より広い「公同性」をもつ教団の形成に、創造的に関わっていくこと、それが、「1784年の按手礼」のウェスレーから、日本におけるメソヂストが学ぶべき点ではないだろうか。

注

* 本論は、1995年度、東京神学大学に提出した修士論文の要約である。

* 略語表

<i>Works</i>	Jackson, Thomas, ed. <i>The Works of the Rev. John Wesley</i> , M. A. 3 ed. 14 vols. London: Mason, 1829-1831. Reprinted Grand Rapids, MI: Baker Book House, 1978.
<i>Journal</i>	Curnock, Nehemiah, ed. <i>The Journal of the Rev. John Wesley</i> , A. M. 8 vols. London: Epworth Press, 1909-1916.
<i>Letters</i>	Telford, John, ed. <i>The Letters of the Rev. John Wesley</i> . 8 vols. London: Epworth Press, 1931.

- 1) *Journal*, viii, p.15.
- 2) Davis, Rupert E., and Gordon Rupp, eds. *A History of the Methodist Church in Great Britain*, vol.4. London: Epworth Press, 1988, pp.199-200. Cf. *Journal*, vii, p.16.
- 3) Thompson, Edgar W. *Wesley: Apostolic Man: Some Reflections on Wesley's Consecration of Dr. Thomas Coke*. London: Epworth Press, 1957, pp.8-9.
Journal, vii, p.16.
Davis, Rupert E., and Gordon Rupp, eds. *op.cit.* vol.2, pp.145-6.
Bucke, Emory S., ed. *The History of American Methodism*, vol. 1. Nashville: Abingdon Press, 1974, p.201.

とにかく一次資料が存在しない以上、これ以上の詳細な描写は不可能である。
以上の典拠とて、種々の資料からの類推に過ぎない。

- 4) *The Sunday Service of the Methodists in North America*. Library of Methodist Classics. Nashville: United Methodist Publishing House, 1992. Facsimile of the 1784 first London printing, pp.i-iii.
- 5) 岩本助成「1784年の按手礼」をめぐって, 大阪基督教短期大学『神学と人文』19 (1979), pp.5-7.
- 6) 「自分自身を捧げた人々全体の中から、わたしが最も価値のあると判断した人々を、わたしが選んだことに関して、わたしは、わたしに属する以外のあらゆる人々の良心によっても、こういう事情で裁かれることを、断固として拒絶します」。 *Letters*, vii, p.262.
- 7) Davis, Rupert E., and Gordon Rupp, eds. *op.cit.* vol.2., pp.147-150.
- 8) *Works*, xiii, p.272.
- 9) *Ibid*, xiv, pp.303-4.
- 10) ここで言う「公同性」とは、教会が東西に分裂する以前に信奉されていたもの、すなわち、「聖書 (Scriptures), 信条 (Creeds), 聖礼典 (Sacraments), 歴史的主教職 (Historic Episcopate)」を条件とする。これは、現在、「ランベス4綱領」として、全世界のアングリカン・コミュニオンによって、教会の「公同性」の原理とされている。4番目の「歴史的主教制」の解釈をめぐっては、様々な立場がある。高教会主義者としてのウェスレーは当然のごとく次のように解釈するであろう。「使徒継承の主教の按手に基づく三職位」。この解釈が、生涯そのままであったかどうか、それは、本論文の課題である。
聖公会神学院編『ランベス4綱領の百年』, 神学の声第61巻, 聖公会神学院, 1990年。
- 11) Hildebrandt, Franz. "The Wesley's Churchmanship." *Drew Gateway*, no. 31 (1961), p.157.
- 12) 父サムエルの高教会主義は、17世紀カロライン神学者の伝統の中にあったが、それは、臣従拒誓者のそれではなかった。「(彼の高教会主義は) 主教ランスロット・アンドリュースに従うことを意識していたものであって、ウィリアム・ロードではなかった。すなわち、彼は国教会が聖職位階制の組織体であるよりも、また教会法による組織体であるよりも、むしろ、原始キリスト教と地上における全体の教会の公同教会の継続性であることに、重大な関心を持ったのである」。Schmidt, Martin. *John Wesley: A Theological Biography* vol. 1.

Nashville: Abingdon Press, 1962, pp.40-41.

- 13) 英国国教会にはもともと、初代教会を模範として自らを形成していく姿勢があった。特にローマの影響下に入る以前の教会教父との連続性に、自らの使徒性を見いだそうとしてきた。そして、各々が、みずからの典拠を聖書に求めた。例えば、長老主義者もまたしかりである。その意味で、長老主義者もまた「歴史的長老職」を信奉しているという点で、アングリカニズムと等しいと言えるのである。
- 14) Baker, Frank. "John Wesley's Churchmanship." *The London Quarterly & Holborn Review*, no.185 (1960), p.210.
- 15) *Works*, vii, p.164-5.
- 16) Baker, Frank. "John Wesley's Churchmanship.", p.211.
- 17) ホーリー・クラブには、1732年にジョン・クレイトンが入会した。彼は、初代教会の生活を守ることに強い影響を受けていた。このことは、臣従拒誓者からの影響であった。臣従拒誓者とは、名誉革命当時、ジェームズ2世の王権神授を信じ、オラニエ公ヴィルヘルムの王位継承を無効とし、臣従を拒否したカンタベリー大主教サンクロフトをはじめとする一団を指す。同時に彼らは、初代教会の伝統を特別に強調して、特に、使徒継承に基づく歴史的な主教職の保存につとめた。
Schmidt, Martin. *op. cit.* vol.1, pp.102-3.
- 18) 野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』, 日本基督教団出版局, 1975年, 571頁。
- 19) *Journal*, i, p.468.
- 20) Baker, Frank. "John Wesley's Churchmanship.", p.210.
- 21) 1698年に、トマス・ブレイらによって設立された、「キリスト教知識普及協会 (SPCK)」の宣教部門が独立して、1701年に設立された宣教協会。1799年に設立された宣教協会「CMS」が、はじめから海外宣教を意識して、福音主義低教会の流れを汲むのに対し、「USPG」は、主として海外在住の英国人の司牧を目的とし、高教会主義にたった。
- 22) Schmidt, Martin. *op.cit.* vol.1, pp.156-7.
- 23) *Ibid.*, pp.195ff.
- 24) *Journal*, i, p.419.
- 25) Baker, Frank. "John Wesley's Churchmanship.", p.211.
- 26) *Works*, xiv, p.225.
- 27) *Letters*, vii, p.106.

- 28) *Works*, i, p.41.
- 29) *Journal*, i, pp.170-1.
- 30) Baker, Frank. "John Wesley's Churchmanship.", p.214.
- 31) 野呂芳男, 前掲書, 575頁。
- 32) Lawson, A. B. *John Wesley and the Christian Ministry*. London: S.P.C.K., 1963, p.21.
- 33) *Ibid.*, p.45.
- 34) *Letters*, ii, pp.54-57.
- 35) 塚田理編『イギリスの宗教』, 聖公会出版, 1980年, 234頁。
- 36) *Works*, i, pp.262-3.
- 37) Rack, Henry D. *Reasonable Enthusiast: John Wesley and the Rise of Methodism*. 2nd ed. Nashville: Abingdon Press, 1993. first American Edition. first published London: Epworth Press. 1989, p.293.
- 38) Davis, Rupert E., and Gordon Rupp, eds. *op.cit.* vol.4., pp.77-78.
- 39) *Letters*, ii, pp.54-57.
- 40) *Journal*, iii, p.229.
- 41) *Journal*, iii, p.232.
- 42) King, Peter. *Enquiry into the Constitution, Discipline, Unity and Worship of the Primitive Church*『初代教会の組織, 條例, 一致, 礼拝に関する研究』この書物は, 1691年に刊行され, 1712, 1713, 1719の各版, 1839年の注釈なしの版, 1733年のラテン語とドイツ語版など, 様々な版がある。
- 43) Vine, Victor E. "Wesley, King and Coke." *Proceedings of the Wesley Historical Society* 31 (1957-1958), p.65.『初代教会の組織, 條例, 一致, 礼拝に関する研究』の2章, 3章, 4章からのVineによる抜粋。
- 44) Baker, Frank. "John Wesley's Churchmanship.", p.213-4.
- 45) Baker, Frank. *John Wesley and the Church of England*, London: Epworth Press, 1975, p.145.
Thompson, Edgar W. *op.cit.*, p.18.
- 46) *Ibid.*
- 47) Baker, Frank. "John Wesley's Churchmanship.", p.213.
- 48) *Letters*, iii, p.182.
- 49) Lawson A. B. *op.cit.*, pp.76ff.
- 50) Vine, Victor E. "Wesley, King and Coke.", p.66.

- 51) *Letters*, i, p.322.
- 52) Vine, Victor E. “Wesley, King and Coke.”, pp.66-67.
- 53) Baker, Frank. *John Wesley and the Church of England.*, p.263.
- 54) Schmidt, Martin. *op.cit.* vol. 2. part 2., p.197.
- 55) *Ibid.*
- 56) Baker, Frank. *John Wesley and the Church of England.*, p.263.
- 57) *Letters*, vii, p.262., p.284.
- 58) *Letters*, vii, p.239.
- 59) Baker, Frank. *John Wesley and the Church of England.*, pp.273ff.
- 60) *Letters*, vii, p.41.
- 61) 野呂芳男, 前掲書, 194-5頁。